

礼拝 2020年4月26日（日）

題 『岸に立つ主イエス』

テキスト：ヨハネ21：1～14

（聖書のことばは最後にあります。）

わたしたち、新型コロナウイルスの不安と恐れの中にありますが、修禱館（牧師館）の前庭には、ツツジとハナミズキがきれいに咲いて心を和ませてくれます。自然を通しての神さまの恵みに感謝しています。

今日の聖書箇所には、復活された主イエスがガリラヤ湖畔で弟子たちにその姿を現われされた場面が記されています。イエスが姿を現されたのは、これで3度目だといわれます。

ペトロを初めとして弟子たちは、イエスの復活後、エルサレムから故郷のガリラヤに帰って来ました。この時、彼等はどうのような気持ちだったのでしょうか。「故郷に錦を飾ると」いう言葉がありますが、彼等はまったく反対だということになります。イエスに従ってかつて3年あまり故郷を離れたのでしたが、エルサレムでイエスが十字架につけられたことによって、彼等の夢は、はかなくも崩れ、破れ果ててしまったのです。こんな中で、希望もなく、自分たちのことを知っている人の多くいる故郷に帰るには相当の勇気も必要だったことでしょう。しかし、彼等にはそうすることしか道がなかったようです。

「よみがえられたイエスはガリラヤに行かれる」という天使からの知らせを弟子たちは聞いていたことも、故郷に帰る動機になっていたかもしれません。聞いた言葉が人を動かすことがあるのです。十字架の前の失望と、人生の挫折、復活のイエスに出会った驚きととまどいの中で、彼等はガリラヤに向かったことでしょう。

彼等は昔の生活に戻ったのです。日常の生活です。昔やっていた生活です。しかし、新しい再出発でもあったのです。日常の生活とは、取り立てて変化のない生活、同じことの繰り返しの生活、血湧き肉踊るようなことのない生活です。最近「なりたい自分にならなくても、なった自分で生きたらいい。」という言葉に出会いました。立派な人になっても良いのですが、たとえならなくても、今ある自分を受け入れていける人は幸せだと思うのです。

聖書にもどりますと、3節「シモン・ペトロが、「わたしは漁に行く」というと、彼らは『わたしたちも一緒に行こう』と言った。」とあります。弟子たちは、昔の生活そのままを行っています。「その夜は何もとれなかった」ここには、宣

教の働きに苦勞していた後の初代教会の姿もあることが思われます。伝道の働きに苦勞のない教会はないのです。これで安泰というような教会があるとすると、その組織は、神よりも人の力を頼みとしていると言えるかもしれないのです。私はもちろん、人間は誘惑に弱いですから、気をつけていないと、すぐに神以外の力、地位・学歴・数・制度・お金などなどの力に支配されてしまうのです。

この世のものは、どんなものでも偶像になってしまう可能性があるのです。

宣教の働きのために勞苦する場所、そこは、復活のイエスに出会う場所、神さまの恵みの働きを知る場所でもあるのです。復活のイエスに出会っても、神の働きに出会っても、多くの場合初めは分からないのです。後になって、主イエスとの出会いを確認出来ることが多いのです。「あの時、固くなっていた私の心がやわらくなった。」「冷めていた心が温かくなって来た。」「ああ、そういうことだったのか」と腑に落ちるという経験をすることがあります。

主イエスは、悪戦苦闘し働く弟子たちと共に、同じ暗闇の中に立っておられたのです。4節「すでに夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。」とあります。イエスは暗闇の中で、弟子たちをじっと見ておられたのだと思えるのです。わたしは、この「岸に立つ」イエスさまに心動かされ感動するのです。

「岸」とは、境界を表しています。地上と海の境、暗闇と朝の境、生と死の境などなど。十字架に死なれ、よみがえらたイエスさまは、悪戦苦闘する弟子たちを、生と死の境界線にたって、ずっと見守ってくださっていたのです。そして今も見守り続けてくださっているのです。イエスさまは天と地を創られた神さまの思いと心を、自らの姿で現してくださっているのです。今、新型コロナウイルス感染拡大の不安と恐れの中に生きている私たちのことを、心を込めて見守ってくださっているのです。わたしたちも人と接することの多い仕事を担われている人々のことを覚えて祈りたいと思います。

イエスさまはいくら努力しても魚がとれず苦勞している弟子たちに知恵を与えてくださいました。

6:イエスは言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。」そこで、網を打ってみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができなかった。」「舟の右側」なぜ右側なのか、わたしには十分には分かりませんが、古代から「右は正しい方」という意味はあったと思われます。

この時、神さまが示された方向です。それは、わたしたちが考えたり、思った

りしている方向ではないかもしれませんが、神さが示すイエスさまの言葉に従った時、弟子たちの思いを超えて魚を獲ることができるという道が開けたのです。きっとわたしたちにとってもそうだと信じます。主イエスの言葉に従う時、道が開けて行くということです。これは「考えるな」とか「計画を立てるな」とかということではなく、優先事項として、見守ってくださっているイエスさまの言葉に聞き、従うという姿勢が大切だということです。その時、思いもよらぬ道が開けて行くのです。神さまがきっと開いてくださるのです。このことを信じましょう。

主イエスは、神さまは、どんな時でも私たちと共にいて見守って下さる方なのです。うれしい時、悲しい時、辛い時にもです。旧約聖書詩編 121 編 1 節～4 節に次のようにあります。

「1:目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。わたしの助けはどこから来るのか。2:わたしの助けは来る／天地を造られた主のもとから。3:どうか、主があなただけを助けて／足がよろめかないようにし／まどろむことなく見守ってくださるように。4:見よ、イスラエルを見守る方は／まどろむことなく、眠ることもない。」と。 夜通し働いても魚の獲れない弟子たちをイエスさまは見守り続けてくださったのです。そして、イエスさまの方から声をかけてくださり、また、知恵を与えて下さり大漁を与えてくださったのです。

ですから、わたしたちも日常の人間関係の中で周りの人をできるだけ温かいまなざしで見守りたいのです。

主イエスはこの後、愛する弟子たちのために朝食の備えをしてくださいました。モーニングサービスです。1 2 節「さあ、来て、朝の食事をしなさい。」

神さまは、私たち一人一人のためにも、世界のためにも、いろんな備えをしてくださっているのです。私たちは誰のために、どのような備えをするのでしょうか。教会の働きは誰か一人の働きではないのです。組み合わせられた共同の働きなのです。

身体が弱って、病気でたとえ体は思うように動かせなくても、わたしたちには教会の働きや世界の働きを覚えて祈ることができるのです。そして、この祈るという奉仕はなくてならぬ、かけがえのない働きなのです。

困難な今、わたしたち神さまから与えられたもの認めて、見守られていることを思い、他者を見守る思いを持ちながら覚え合うことを大切にしたいと願うのです。

◆イエス、七人の弟子に現れる

- 1:その後、イエスはティベリアス湖畔で、また弟子たちに御自身を現された。その次第はこうである。
- 2:シモン・ペトロ、ディディモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出身のナタナエル、ゼベダイの子たち、それに、ほかの二人の弟子が一緒にいた。
- 3:シモン・ペトロが、「わたしは漁に行く」と言うと、彼らは、「わたしたちも一緒に行こう」と言った。彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。
- 4:既に夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。だが、弟子たちは、それがイエスだとは分からなかった。
- 5:イエスが、「子たちよ、何か食べる物があるか」と言われると、彼らは、「ありません」と答えた。
- 6:イエスは言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。」そこで、網を打ってみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができなかった。
- 7:イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに、「主だ」と言った。シモン・ペトロは「主だ」と聞くと、裸同然だったので、上着をまとい湖に飛び込んだ。
- 8:ほかの弟子たちは魚のかかった網を引いて、舟で戻って来た。陸から二百ペキスばかりしか離れていなかったのである。
- 9:さて、陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。
- 10:イエスが、「今とった魚を何匹か持って来なさい」と言われた。
- 11:シモン・ペトロが舟に乗り込んで網を陸に引き上げると、百五十三匹もの大きな魚でいっぱいであった。それほど多くとれたのに、網は破れていなかった。
- 12:イエスは、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と言われた。弟子たちはだれも、「あなたはどなたですか」と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからである。
- 13:イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。
- 14:イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である。

